日刊 動労千葉

国鉄千葉動力車労働組合
〒260 千葉市中央区要町2番8号（動力車会館）
電話 （鉄電） 千葉 2935・2939番
（公） 043（222）7207番

97.1.22 No. 4533

JR総連革マル打倒にこそ、国鉄決戦勝利の道

国労中央本部が、昨年八月三〇日にJR各社に対して、申入れを行い、清算事業団闘争の政治決着ー和解路線に向って大きく踏みだした。

国労本部が、この、いわゆる「八・三〇申入れ」という方針を打ち出して路線転換を表明した途端に、たちどころにJR総連革マルがこれにつけこんで無茶苦茶な組織破壊攻撃を開始している。

「八・三〇」撤回を！

進むべき道は、はっきりしている。「八・三〇申入れ」を撤回し、自らの力で闘い、国鉄闘争の勝利に向って、JR総連革マル打倒へ総決起することだ。

「八・三〇申入れ」とは、①国鉄改革法二三条を認め、②JRの発展に寄与する、③今までの紛争案件を取り下げるーこれによって「東日本包囲網」をつくり、政治決着ー和解のために政府・資本、「お上」にお願いして、JR東日本に圧力を加えてもらおうという他力本願の方針だ。

こうした考え方にたつということは、組織破壊攻撃や合理化攻撃に対する職場からの反撃の闘いが放棄されてしまうということを意味する。

そして、この一〇年間苦しみぬいてきた闘争団、清算事業団闘争を裏切るものであるといわざるをえない。

そもそも、政府・運輸省は国労の味方なのか、国労解体ー国鉄労働運動解体は政府の基本方針だ。支配階級には、あまりにも異様な当局と革マルの結託体制を解体して純御用組合をつくるという狙いがあることも確かだ。しかし、動労千葉や国労の主力をかかえるJR東日本においては、分割・民営化過程と同じく、JR東労組革マルを使って国労、動労千葉を破壊する方針をとっていることははっきりしている。

破産した「国労解体」

今年は、分割・民営化から一〇年を迎える国鉄闘争の正念場の年だ。決戦にあたっての、逡巡、中途半端な方針、日和見主義は結局のところ惨めな敗北をもたらすだけだ。

国労の「八・三〇申入れ」に対して、ここぞとばかりにファシスト労組ーJR総連革マルがかさにかかって襲いかかってきた。

いわく、「国労の方針転換は本当なのか」「本音と建前の二枚舌ではないのか」「国労は変質した」「自民党権力者・悪徳経営陣に身を売った国労」・・・・だが、とうの昔に敵に身を売渡し、奴隷の忠誠を誓って生きてきたのは革マル自身であることを知らぬ者はいない。

JR総連革マルの「国労解体方針」とは、国労に「もっと屈服しろ」「JR総連のようになれ」「そのために解体する」と、お払い箱を恐れ、生き残りをかけて、「国労解体方針」をもって政府・資本に自らを売り込むものだ。

だが、この「国労解体」攻撃は、なんの成果もなく、逆に、闘う国労の仲間達によって各地で撃退され、反対にJR東労組の組織的危機をなお一層深めるものに転化してしまった。

このことは、国労高崎地本で青年労働者の、仙台地本で新規採用の青年の国労加入がかちとられていることにも明らかで、高崎では、二二才の若者がJR貨物労組の革マル支配と訣別し国労に加入。八月の車掌区のことを教訓化して、防衛行動に総決起し、新しい仲間を守りぬいて、JR貨物労組を圧倒しています。

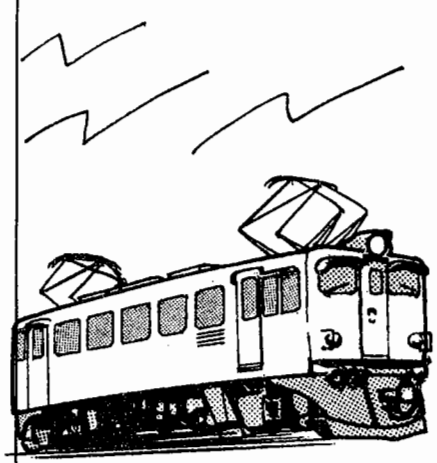
闘うこと！

断固として闘う方針をもって対決すれば、ガタガタと組織が崩れるのはJR総連の方だ。

「黙って見ていたらぶち壊されてしまう」（JR東労組書記長島田）。だから、さらに絶望的に凶暴化してJR総連は必死になって国労、動労千葉解体攻撃にでてこざるをえない。

だから、今こそ絶好のチャンス到来がしているのだ。「八・三〇申入れ」なんかしている場合ではない。

一〇年間もの厳しい闘いを貫いた国鉄労働者は力をもっている。ここまできて負けてなるものか、もうひとふんばりだー

やりたい放題の合理化、勝手し放題の配転、昇給・昇格差別ー清算事業団闘争に仇なすJR総連革マル打倒こそ国鉄闘争勝利の道だ。

国労、動労千葉解体攻撃を迎え撃ち、JR総連解体・組織拡大の闘いにたちあがろうー